ゆったりの慶良間諸島で重い歴史を

県議選挙で野党勝利と6月23日の終戦63年の余韻が色濃く残るなか、沖縄に向かった。昼すぎに沖縄空港に到着。あわただしい昼食をとり那覇港からフェリー「ざまみ」に飛び乗り阿嘉島へ。阿嘉島は那覇から真西にある慶良間諸島の中で最も那覇から遠い離島。片道料金1860円、1時間40分の船旅は、雨とつれづれ。この時期この一帯を訪れるのは、ダイビングを目的とした人々。港には、民宿と連携したダイビングを商いとする「ショップ」の車が迎えにきている。民宿に着くや、一人の相棒はさっそくウェットスーツを身に着ける。メタボの身体には、しめ付けが相当きつそう。ドクターストップでダイビングを断念した二人は、海岸線を散策。碧い海、珊瑚礁の美しさは、人ひとり出会わない道を遠くの浜までいざなう。途中、「あれはパイナップルか」などと南の島らしい会話がつづく。宿に帰ると80歳近い、宿の先代の主人がゆっくりビールを飲んでいる。ここへ座れということで懇談。向かいの渡嘉敷島にはハブもいるがこの島には蛇がいない、とまずは安心させてくれる。沖縄戦最初の地上戦当時の話では、山に向かって逃げた逃げた、食糧難でパイナップルに似た「あだん」も食べていた、などと。旅の一番の楽しみはなんといっても晩飯。民宿で10人ほどが庭先の縁台で、主人が釣ってきたというカツオの刺身、そばチャンプル、鳥と野菜のカレー煮などの大皿を囲みビールで乾杯。同宿者というだけで会話が弾む。毎年この時期に来ている、年に3回は来る、といった常連さんたち。私たちを先導してくれたYさんもその一人。そんな会話の雰囲気は、ここはユッタリとする居場所づくりというもの。その後、ダイビングをする人たちが「ショップ」に集い宴会。ここでも馴染み同士の会話が楽しそう。泡盛「残波」でつくるドリンクが心地好い。

2日目は、「おじさん」という魚を一匹釣った後、一人でバイクをレンタルして、地上戦のとき逃げたという山中へ。鹿とばったり、この鹿「阿嘉鹿」という天然記念物。その後、1945年3月26日米軍が初めて上陸したという記念碑がある慶留間島、外地島までバイクをとばす。たった1泊の阿嘉島、ゆったりとした時間と歴史の重みの両方を感じさせてくれました。

世界遺産　琉球王国のグスク

沖縄戦での集団自決の重い歴史をもつ阿嘉島を、たった一泊で別れをつげる。帰りは高速艇「クィーンざまみ」で料金2750円、1時間ほどで那覇に。この日の宿は、東横イン。ツイン部屋2人で7145円の格安が選んだ理由。夕食は国際通りのステーキ屋で安めの肉とちょっと贅沢なボージョレー赤ワイン。トータル12200円。宿代の節約がワインにまわった感じ。賑やかな通りの土産物屋を覗くのは、泡盛「残波」の値段調べのため。

3日目、ホテルまで届けてくれたレンタカーで史跡めぐり。ちなみにこの1300cc車、3日間借りて13025円と割安。定番の首里城は、20年近く前の趣と変わっている。守礼門近くにあったはずの屋台的なお土産屋さんがなかなか目に入らない。その後、中村家住宅を見学。18世紀の地域の長（地頭代）の家屋。中規模と思える家屋のまわりには牛、馬、豚の舎と庭園が配置されている。この管理する土産物屋で砂糖キビの汁で染めた鮮やかな緑色のスカーフを2枚求めた。その後、中城、勝連城をどちらも概観できる位置まで足を運ぶが、中までは入らず。

車を東に向けて海中道路を横断し、美海を見るためにドライブで伊計島ビーチまで。この浜辺、株式会社運営で外国人ファミリーが圧倒的。踵をかえすように、読谷村の宿に近い史跡、1400年代に築城した座喜味城跡に。ここは沖縄戦前には日本軍の砲台や、戦後には米軍のレーダー基地が置かれたため一部の城壁が破壊され1972年（昭和47年）5月15日、沖縄の本土復帰と同時に国の史跡に指定され、2000年11月首里城跡などとともに、琉球王国のグスク及び関連遺産群としてユネスコの世界遺産（文化遺産）にも登録されている。そして、残波岬に近い、うたごえペンション「まーみなー」に到着。夕日が楽しみな時間でした。

平和を希求する沖縄の人たち

沖縄の旅、３泊・４泊目は読谷村にある歌声ペンション「まーみな―」で過ごす。沖縄民商の紹介まさには正解。宿主が素敵な方のみならず、眺望と風通しがいい。宿主の会沢芽美さんは、メッセージシンガー。沖縄に魅せられて東北から移住してきた生きざまは、メッセージの柱、平和に繋がっている。

旅の４日目、「読谷＆北部平和ツアー」に。会沢さん運転のワンボックスカーに新潟からの女性と娘さんと同乗。まずは 15 分ほどで、チビチリガマに。車一台がやっと入れる道から少し坂を歩く。ガマは幅 10m 程度、奥行は 30m 程度だろう。ここでは、45 年 4 月 1 日以降の米軍の侵攻により、翌 2 日、避難していた住民約 140 人中、83 名が集団自決、83 人のうち約 6 割が 15 歳以下の子どもであった、という。同じ村にあるシムクガマには 1000 人が避難していたが集団自決はなかった。シムクガマには、米軍は民間人を殺さないと主導した元ハワイ移民の方がいたから、とも言われている、と説明を受ける。

つづいて基地のなかにある唯一の役所、読谷村役場に。中日がキャンプを張る野球場と隣接している。読谷村での基地面積を 43%から 36%に縮小させていった経緯には、これらの施設を一時使用の形態を活用しながらの秘策があったという。役場玄関には、憲法９条全文を著した碑が建てられている。揺るぎなくたたかっているなぁー、と感激の場面。

その後、名護市辺野古へ。米軍キャンプ・シュワブ沿岸部への普天間飛行場移設に反対する市民団体の団結小屋を訪問。境界を示し、立ち入り禁止を示すカミソリ鉄条網には全国からの抗議のリボンが。ここでも平和へのたたかいの連帯が見て取れる。

旅の最終日は、ひめゆりの塔など南部の戦跡めぐり。５日間の旅では、のんびりともいかなかった備瀬の海岸近くのフクギ並木、今度行く時はここを中心に、ゆっくりと歩いてみよう、本当にぶらりとしたい、と思った旅であった。